

「山村づくり講座」が始まりました!

岐阜県立森林文化アカデミー
原島 幹典

森林文化アカデミーは、この4月から新しいカリキュラムで臨んでいます。そのひとつが、クリエイター科に新設された「山村づくり講座」です。今回はこの講座についてご説明したいと思います。

「山村づくり講座」のミッションは、「山村地域の生活文化や里山環境を理解し、その存続、継承、再興、活用を目指し、山村を内と外から活性化できる人材を育成すること」です。皆様ご存知のとおり、県内に限らず、日本中の山村では例外なく過疎化・高齢化が進んでおり、「限界集落」などというありがたいレッテルが貼られ、行政からも社会からも見捨てられてしまった感が否めません。おそらく十数年後には、それらの地域の大半は無人化し、数百年間に及ぶ日本独自の山住み文化は、誰にも継承されぬまま歴史の底に埋もれてしまうことでしょう。このことについては、いろいろな意見が聞こえてきますが、地域に住んでいる方の声が聞こえてこないのはなぜなのでしょう?そもそも、いったい誰が地域の未来を決められるのでしょうか?…

山村づくり講座では、「聞き書き」という手法を用い、地域生活者の話をそのまま文字化するところから学びがはじまります。人が自然の中で生きるためにどのような努力がなされてきたのか、持続可能な暮らしとはいったいどういうものなのか?その一端を知ることになるでしょう。

さて、過疎高齢化、限界集落化という社会現象は、今や小規模な山間集落地域だけにとどまらず、山の裾野に位置する中山間地域にも波及しています。特に最近ではシカ、イノシシ、サル等野生動物による農業被害が激化する傾向にあり、効果的な防除策もとられぬまま、もはや食料自給すら困難である地域もあり、特に高齢者は、病気等を機に住みなれた地域を離れる例が増えているようです。これらの傾向から、この数十年間で人の居住域は大きく縮小し、都市部及び都市周辺部に集中することが想像されます。そして食料、エネルギーの地域外依存度は今以上に強まるものと考えられますが、果たしてこの社会は健全なのでしょうか?このシナリオは人類が目指すべき持続可能な循環型社会の日本版に繋がるのでしょうか?



▲美濃市片知地区板山にて(地域のお宝探しワークショップ)



▲揖斐郡揖斐川町春日地区にて(ヤマチャで紅茶作り体験ツアー)

山村づくり講座は自らにそこを問いかけます。そして自然環境の多様性と同様、社会・産業構造の多様性の重要性と、その機能の維持向上により享受可能となる食住のセーフティーネットとして、あるいは木育・食育等教育の場としての活用等を提案し、中山間地域を含めた山村地域の活性化と、社会的存在意義を追求してゆきたいと考えます。

但し、山村地域の存在意義が社会に認識されたとしても、交付税や公共事業にばかり依存しては、地域住民の自覚や誇りは芽生えません。自らの強みである自然環境の豊かさや、山村暮らしの知恵・技・心の価値を掘り起こし、様々な形で商品化し、地域内外にサービス提供することにより、自活可能な経済力を維持する努力が必要です。おりしも都会では、健康、癒し等を求め、山間地域の暮らしにあこがれ、その生活を楽しみたいというニーズも増えてきていますから、有能で地域を代弁できる仲介者や、都市側のビジネスパートナーの活躍が期待されます。企業、学校、都市地域との組織間のパートナーシップ形成も、山村づくり講座で挑戦したいテーマのひとつです。

都市からの移住・定住者を募る山村地域も見受けませんが、単なる憧れや好奇心だけで田舎に移住することは、新たな問題を生むことも多いため、受入れの仕組みや仲介システムについて再考する必要があります。地域機能が健在であれば、入りたい人ではなく、地域側が来てほしい人を選ぶべきです。閉鎖的だと批判されることを恐れず、なぜ閉鎖的なのかその訳を自らが知ることと、それを外部者にどう伝えるかも、本講座の授業で学べることのひとつです。

山村づくり講座は、そういう山村暮らしの知恵・技・心を次世代に伝えることに加え、もはや衰退・消滅が避けられない過疎地域に対し、誰に何が出来るのか?あるいはすでに無人化した集落の利活用等について、実践活動を通じて学び、研究し、その成果を県民の皆様に還元してゆきたいと考えております。皆様の地域にお邪魔した折には、どうぞご指導のほど、よろしくお願いたします。

●詳しい内容が知りたい方は

TEL(0575)35-2525 森林文化アカデミー まで